

久しぶりの研究授業でしたが、今年度最後の研究授業でもありました。今年度、トリを務めてくださったのは、2年次のフレッシュな吉門先生です。教材は、私が子どもの頃から読んでいた「モチモチの木」です。なんだか懐かしいなと感じながらこの授業を参観された方も少なくないのではと思います。

単元名 「人物なりきり音読発表会をしよう」

教材名 「モチモチの木」(東京書籍3年下)

吉門 修平 教諭

### 学習の流れ

- 3年生 「モチモチの木」  
学習の流れ(全12時間)  
人物なりきり音読発表!
- 行動や会話から人物を想像し、その人物らしさが伝わるように音読しよう
- 学習の流れ
- 1 これまでに学習した物語を思い出し、これからの学習のめあてをつかもう。
  - 2 「モチモチの木」って、どんな木かな?
  - 3 って、どんな人物?
  - 4 の人物像を「人物カード」にまどめ、音読の工夫を考えよう。
  - 5 って、どんな人物?
  - 6 豆太らしさが伝わる音読をしよう。
  - 7 様子や気持ちが伝わるように
  - 8 グループでどの人物らしさを想像しながら音読しよう。
  - 9
  - 10 どの人物らしさが伝わる音読発表をしよう。
  - 11
  - 12 単元の学習を振り返ろう。
- ついでに  
行動や会話を手がかりに、人物像を考え、その人物らしさが伝わるように音読する力

並行読書

### 最終板書

単元に入る前から、「性格を表す言葉」を集めて掲示していました。

モデルの掲示  
「人物カード」

前時の学習が振り返れる  
教室環境。

教師による「音読発表」  
ゴールイメージ

本時の授業で身に付けさせたい資質・能力は、「叙述をもとに、中心人物(豆太)の性格や気持ちを想像しながら読むこと」とし、その力を付けるため手立てとして「導入時に、ゴールまでの見通しを持たせ、本時の必要を確認すること」や「子どもたちが中心人物の人物像に迫る学びができるように繰り返し・揺さぶりの発問をすること」の2つを組みこんで授業計画を立てていました。

この単元で力を付けるために、公開授業の前から「性格を表す言葉」を集め背面黒板に掲示したり、「モチモチの木」の怖い様子が分かる挿絵を掲示したりと・・・教室全体が「モチモチの木」を学ぶ環境になっていました。また読む力が弱い児童にも分かりやすいように、蛍光ペンを使って大事なところを分かりやすくしたり、板書計画を練ったり・・・事前授業をしてくださった森田先生の御指導のもと、吉門先生は熱心に授業に取り組んでいました。その気持ちが子どもにも伝わっていたのでしょう。研究授業に入る直前の子どもたちは少し緊張しながらも全員で音読を始め、とても気合いが入っているように見えました。

### 研究協議より

- 主** ○めあてを子どもとしっかり確認し、目的を持って授業に入っていたので音読を意識した発言も見られた。  
○叙述に戻って子どもたちは自分の考えを言うことができていた。  
●「分かりました」と言っていた子どもたちは比喩ながら聞いていたのか?ちょっと違うなと思った子どもはいなかったのか?間違っただけを捉えている時には、教師が「本当にそうなの?」と返してあげるとよい。
- 対** ○問い返しのある対話ができている子どもたちもいて、友だちの考えをメモしながら対話する姿も見られた。  
●豆太の変容についての対話が見られなかった。もっとしっかり捉えるべきだったのでは?  
●線を引くだけでなく、予習で豆太の人物像をノートにまとめるまでしていただいたら、対話をもっと深める時間が生まれたのではないかな。  
●対話を人と人との対話として捉えるのではなく、物語との対話をもっとさせたい教材である。
- 深** ●心情曲線を先生がさっとまとめてしまったが、子どもたちと一緒に完成させたい。  
●たくさんの「豆太」が出てきた中で「どれが本物の豆太だと思う?」と発問をし、子どもたちを揺さぶりたかった⇒叙述のから人物像に迫ることができたのではないかな。  
●全文を掲示していたが、場面ごとの捉えになってしまって、全文掲示が生かされていない。順を追うよりも全体から読み取っていくべきであった。



### 指導主事より

この単元で付けたい力は現学指に基づき「読むこと」の(ア)(ウ)(オ)であった。この3つの力を付けるためにはどんな言語活動を持ってきたらよいのかをしっかりと持つことが大切。今回ゴールを「音読発表」としていたが(ウ)の力を新学指で見ると、P110[エ]に書いてあるところがポイントとなる。「お話全体を関連付けて読むこと」つまり複数の叙述を関連付けて読むことが大切である。今日の授業では、たくさんの豆太が出たが、物語全体でどんと子どもたちに投げかける必要があった。読む力が弱い子どもへの配慮として順に読んでいったが、「全文シート」を児童にも持たせることが一つの工夫としてあげられる。教科書をめくらなくてもよいので「全文シート」を使うことで、場面と場面のつながりも把握できる。子どもたちは一部の言葉だけで人物像を捉えていたので、前後の文脈、前後の叙述にも着目させて考えを深めることが大事。豆太の人物像は一言では説明できないものである。子どもたちに全体から投げかけることで、子どもたちは必要に迫られて自分で叙述に戻って考えるようになる。振り返りも変容が分かるように新しい気付きも視点に入れるとよい。以前と比べると対話が変わってきたのが分かる。「どうということ?」と問い返しの言葉が児童から発せられるようになっている。だからもっとどんと投げかけて子どもたちに任せてもよかったと考える。

辞書を片手に  
「性格を表す言葉」を確認中。



翌日3年2組をのぞいてみると、授業のリフレクションを生かして早速授業を改善していた吉門先生。「心が強い」と「心強い」の違いを辞書で調べながら捉え直していました。今回、授業の前から3年部としてこの授業研究に参加させて頂きましたが、新学指を3人で読みながら「付けたい力が何なのか」「どう音読発表と結び付けていけばよいのか」最後まで悩みました。私自身の力不足を痛感したことでした。授業を最初から創っていくことの大変さや難しさはありますが、授業を通してこそ学べるものがたくさんあります。だから、研究授業をしたり見たりすることが大切で、研究授業によって研究が深まるのだと思いました。